【第9章】

伝伊藤若冲筆《垂柳図》の行方
－《飛燕図断片》について－

若冲が描いた《山水図》《杜若図》の消息は知れないが、広間に描いた《垂柳図》の行方が土居次義『讃岐金刀比羅宮の障壁画』によって発表された。それによると奥書院から剥がされた《垂柳図》は、愛媛県四国中央市にある真言宗・宅善寺の書院に飾られ、その後一部が愛媛県四国中央市の真言宗・定蓮寺に移されたという。

この《垂柳図》の行方は一部の人々の間では知られていたようだ。

当宮職員であった大崎定一氏は昭和20年代に若冲画の一部が伊予のほうへもらわれていったと聞いて宅善寺へ行き、第15代別当宥怡の大幅が床の間にかかっているのを見ている。

昭和34年（1959）～35年（1960）に行った奥書院修理工事を担当した主任の岩下敏也氏は大崎氏に話を聞き、定蓮寺にて《飛燕図断片》の写真を撮影した[1]。

そして昭和45年（1970）5月下旬に白川広子氏の案内で土居氏が定蓮寺に行き《飛燕図断片》を確認。そこでもともとは宅善寺にあったものだと聞き、宅善寺を訪れ住職と面談している[2]。

定蓮寺には5枚の紙片が伝わり残されている。着色で描かれた燕1羽づつを切り抜き、それを同一画面と思われる切り取った紙片に貼付している。

美術史研究者が《飛燕図断片》をどう評しているか紹介しておこう。

•土居次義氏[3]

「著彩の燕はみな飛動感が巧みに表され、しかもその装飾的な作風は紛れもなく若冲の筆と思われるものであった。」

「飛動感に溢れて筆者の非凡の画技を示して余りあるものがある。」

「その卓抜な描写から見て所伝の通り若冲筆と解して不自然ではないものであって、僅少の断片とはいえ、その資料的意義は大きいといわねばならない。」

•辻惟雄氏[4]

「たしかに五羽の燕の特徴あるかたちは若冲の画そのものである。この断片から推測すると《垂柳図》は水墨ではなく著色画であり、著色が剥落して相当傷んだ状態であったことがわかる。」

•狩野博幸氏[5]

「5羽の燕がその姿態のままに切りとられたもので着色された燕の様々な飛翔するかたちと筆の勢いは、まさしく若冲以外の画家を想定し得ない。」

「こうして現代まで惜しみ惜しみ保存された燕のことを知れば画家冥利に尽きるというものではなかろうか。多作家であった若冲の作品で燕が描かれたものとしては定蓮寺の燕とあと晩年の墨絵の掛軸画の2点しか知らない」

•河野元昭氏[6]

「5羽の燕は小さな紙片を飛び出して今にも四国の青い空に舞い上がるかと思われた。そして金刀比羅宮の古巣に飛んでいくかに感じられた。確かに燕だけを切り抜いて不定形の紙に貼り付けたものだが運動感はいささかも失われていない。あふれるようなムーブマンと意匠的なフォルムがみごとに融合し、かの《動植綵絵》の《秋塘群雀図》の雀とまさに気脈を通じている。若冲の鋭敏な視覚は天翔ける燕さえとらえ得たことを示しているが、また南宋の牧谿以来伝えられる形態の記憶を無視することも許されないように思われた。このような燕が何十羽と、青々と葉を垂れる柳のあいだを飛び回っていたのだ」

以上、専門家から《飛燕図断片》の作者は伊藤若冲であると判断されている。《百花図》を描いた紙が竹紙と判明したので、《飛燕図

断片》とその貼られた紙片を共に分析し、同様に竹紙という結果がでれば、より確信へと近づくだろう。

どのような絵が宅善寺書院に飾られていたか土居次義『讃岐金刀比羅宮の障壁画』に住職の記憶していた話が紹介されている[7]。若冲作品の重要な証言であるため記しておく。

> 同（書院）八畳の間は正面に二間幅の床があって、その貼付の向って左寄りに柳の巨幹が描かれ、長い枝を左右に張り出して、正面の床に向って左側の壁貼付や長押上小壁貼付にまで及んでいた。そして柳のまわりには多くの燕が群れ飛んでいて、まさに燕百態の観があったとのことである。

岸岱筆《水辺柳樹白鷺図》は、燕を白鷺に代えてはいるものの、まさに柳の大木が枝を左右に長く張り出すよう描かれ、画題と若冲の構図を継承したことがうかがえる。

それではなぜ、金毘羅から宅善寺書院へ移されることになったのか。宅善寺歴代住職一覧を記した『假過去幽籍帳』に

十代
権大僧都宥清　　讃州金毘羅金光院宥怡和尚資
十三世　住世廿五年　自天保十年四月三十日入院
　　至弘化嘉永安政万延文久三年七月廿七日入
　　字龍海　讃州ノ人

と記されている。宅善寺5代権僧都第8世・宥壑(讃州新田邑)、7代第10世・宥栄（豊田郡新田邑）、8代権僧都第11世・宥豊（西讃中田井邑）、9代権僧都第12世・宥典（讃州ノ人）も讃岐出身のようである。

金毘羅大権現第15代別当宥怡に師事した宥清(讃州ノ人)が、天保10年（1839）4月30日に宅善寺10代目の権大僧都として任命され第13世住職として入院したという。

宥怡は、文化11年（1814）4月18日金光院入院～文政7年（1824）9月9日隠居。天保15年（1844）11月20日遷化した[8]。若冲筆《垂柳図》は土居氏の推測通り撤去されてから間もないころ宅善寺に伝わったと思われる。天保15年（1844）、奥書院から剥がされ、宥怡が遷化するまでの数カ月の間に弟子である宥清へ贈られたのではないだろうか。大崎定一氏が昭和20年代に宅善寺にて確認した宥怡の書も宥清との師弟関係からだろう。

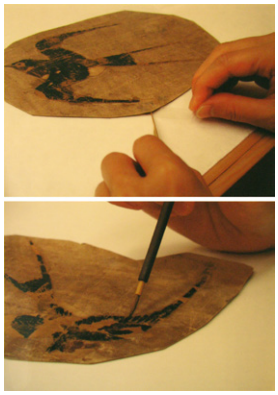
土居氏は宅善寺住職の談として、師の若いころ若冲筆といわれる《柳燕図》が同寺の書院にあり、傷みが甚だしくなったため昭和年代になってから取り払われたと紹介している[9]。そしてこの《柳燕図》が金毘羅の奥書院広間にあった若冲筆《垂柳図》と推定した。

師の若い頃《柳燕図》があったというのが、いつ頃のことかは記されていない。

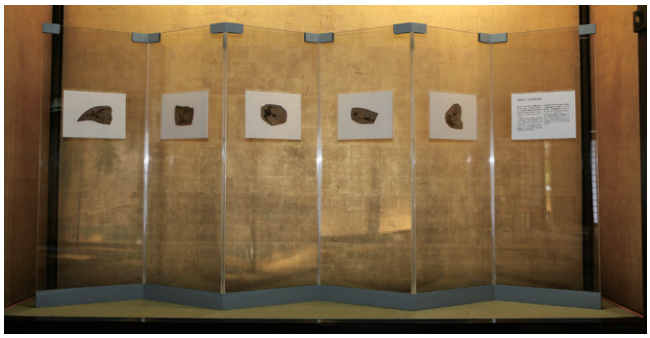
平成19年（2007）当時、宅善寺住職の話によると、「宅善寺は戦中には建物の傷みが激しくなり、戦後GHQが若冲の絵の調査に来た時には同寺にはもうなかったと聞いている」ということであった。GHQの調査が何年に行われたか分からないが、講和条約発効の昭和27年（1942）以前であろう。

土居氏が話を聞いた宅善寺住職が入院したのは昭和21年（1946）である。就任後に取り払ったのであれば、その旨を話していると思われ、昭和初期から昭和21年（1946）の間に宅善寺書院から剥がされたと思われる。同寺書院八畳間は昭和末期か平成初期頃に建て替えされたようで残っていない。定蓮寺にも《飛燕図断片》がいつ誰から寄付されたか記録は残されていないそうだ。

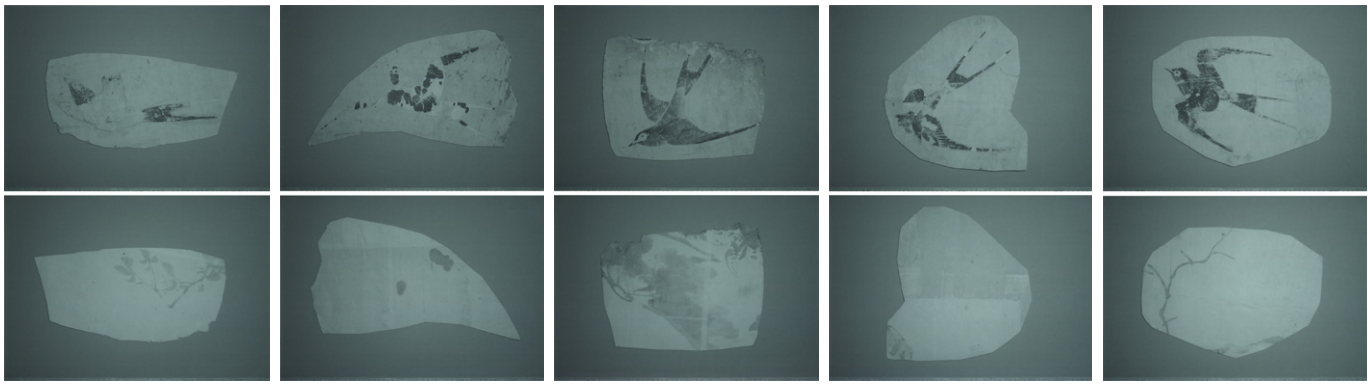
平成19年（2007）、定蓮寺住職に伺った話によると、客殿の大広間（平成7年（1995）に解体済）の茶盆戸棚引出の中に「重要」と注意書きがある茶封筒があり、その中に《飛燕図断片》が入っていたそうだ。当時の保管状況は、紙の封筒の中に「重要品です」と書かれた透明ポリプロピレンの袋5枚それぞれに紙片が1枚ずつ入れてあった。2羽は姿態がはっきりと残されているが3羽は絵具の剥落が顕著にみられた。


修理中

巡回展「金刀比羅宮書院の美」（平成19年（2007）10月1日開催、会場:金刀比羅宮）展示にあたり応急修理が必要と判断され、平成19年（2007）9月4日～9月26日の間、岡墨光堂にて修理が行われた。修理内容は、本紙を台紙に糊付け定着し絵具の剥落止めを実施。台紙ごとブックマウント形式のマッティングを行い、中性紙の保存箱を製作し本紙を納入した。展覧会では160年ぶりに奥書院柳の間に里帰りし公開された。


「金刀比羅宮書院の美」展示風景　（於 奥書院柳の間）

伝伊藤若冲筆　飛燕図断片　紙本着色
9.9～14.6×16.7～22.0（定蓮寺蔵）



赤外線撮影画像

[1] ④朝日新聞社編『高橋由一と金刀比羅宮博物館』pp.93-94
[2] ②土居次義『讃岐金刀比羅宮の障壁画』p.7
③土居次義「讃岐金刀比羅宮の伊藤若冲」『國華』p12では昭和35年5月（1960）下旬、堀家廣子氏の案内で宅善寺を訪れたと記載している。
松原秀明「昭和四十六年図書館参考事務控簿」『こと比ら』27号、1972、p.142には5月29日に土居氏が白川広子氏の案内で定蓮寺へ赴いたことが記載されている。
[3] ②土居次義『讃岐金刀比羅宮の障壁画』p.7
③土居次義「讃岐金刀比羅宮の伊藤若冲」『國華』pp.12-13
[4] ⑤辻惟雄「伊藤若冲筆　花丸図障壁画」『國華』p.30
[5] ⑥狩野博幸「里帰りする若冲の燕」『金刀比羅宮書院の美』pp.124-125
[6] ⑦河野元昭「金毘羅障壁画試論」『金刀比羅宮書院の美』p.18
[7] ②土居次義『讃岐金刀比羅宮の障壁画』p.7
[8] ①佐々木礼三「天保十五年金光院日帳より　前別当宥怡の病気と丸亀藩医尾池紋龍」『こと比ら』、1963、18号、pp.21-26
[9] ③土居次義「讃岐金刀比羅宮の伊藤若冲」『國華』pp.12-14

参考文献

①佐々木礼三「天保十五年金光院日帳より　前別当宥怡の病気と丸亀藩医尾池紋龍」『こと比ら』18号、pp.21-26、1963
②土居次義『讃岐金刀比羅宮の障壁画』マリア書房、1974
③土居次義「讃岐金刀比羅宮の伊藤若冲」『國華』1046、pp.11-20、1981
④朝日新聞社編『高橋由一と金刀比羅宮博物館』朝日新聞社、1983
⑤辻惟雄「伊藤若冲筆　花丸図障壁画」『國華』1334、pp.30-33、2006
⑥狩野博幸「里帰りする若冲の燕」『金刀比羅宮書院の美　応挙・若冲・岸岱から田窪まで』金刀比羅宮・三重県立美術館、2007
⑦河野元昭「金毘羅障壁画試論」『金刀比羅宮書院の美　応挙・若冲・岸岱から田窪まで』金刀比羅宮・三重県立美術館、2007